

海 (かいし) 市 No. 6

● 詩

- 02 前田 勉 篠 笛
04 横山 仁 生活の柄 2

● 招待席

- 06 矢代レイ 黒

● エッセイ

- 10 片津 森 広葉樹の森で
山と木々の物語を聞いた
16 佐藤ただし 水田とツバメ (4)
20 横山 仁 雑 記 (6)

篠 笛

〔「連々篠歌会」に寄せて〕

前 田 勉

奏者が

篠笛を右横一文字に構えて

唄口の手前の縁に下唇を添えると

観客の息さえ止まったかのように

舞台とその空間が

静まりかえった

目をつむる

ほんのわずかな時間

目をつむり

自らの鼓動を確認しながら

まぶたの裏側で弾けとぶ白い光を捉え

呼吸を整える

それから

上唇をかぶせ気味にして

籠めた息を

唄口の向こう切り口に吹き込むと

合わせて奏でる人たちの

息吹が聞こえてきた

いつもの柔らかい音だ

奏者たちが合奏し始めると

切り口をかすってゆく澄んだ音が拡がり

舞台と客席の空間

光と闇を

青白い夕月の色に染めていった

生活の柄 2

横山 仁

眠れない

ホームセンターのトイレで転んで立てなかった老母は
腰痛のベッドで 寝返りも打てず

(なして こうなったべな

(おれ しぬまでねが

這っていく

トイレ

の向こうの海では

戦争屋のヒラリーは すでに死んでいるという

(フクイチの中性子放射性・猛毒トリチウム殺人水蒸気
でか?)

(我欲がアイデンティティの石原慎太郎なら「天罰」と
いうかもしれん)

「戦争の親玉」(Masters Of War 1963) のボブ・ディラン
にノーベル文学賞

「時代は変わる」(The Times They Are a-Changin' 1964)
のか

かわっていく

痛みはうすらいでいき

他力で

おもやみな老母は入浴する

* ㊦は、古風な、強調の前置詞とのこと

黒

矢代レイ

目の前に

黒い絵がある

男たちが

ぎゅうぎゅう詰め
の檻にいれられている

狭い空間には

恐怖

と

悲しみ

が降りつもっている

わたしのなかに囚人がいる
堅固な牢に閉じこめられて
ふだんは膝を抱え

頬が瘦け

おちくぼんだ眼窩には

無力な男たちの

拒絶できない悲運が沈んでいる

背後には

漆黒の闇がうねり上がっている

じつと天井をみつめている

忌まわしい夢をみると

決まって囚人は凶暴になる

看守がどんなにねじ伏せても

わめきつづける

牢から魂へと声が聴こえ

わたしは黒い巨大な翳に呑みこまれる

「北へ西へ^{*1}」

どこへ向かっているのだろう

貨車の小さな窓にむらがり

鉄格子のむこうにみえたのは

メスで切り裂かれた明日の底

不気味な沈黙が

夜を眠らせない

貨車は男たちを引きずるように

北へ

西へ

その先になにが待っているのか

行き先も知らない男たち

うちひしがれた心は

墨色のベールを被っている

風も

檻のなか

鉛色の煙を吐きだす軀

おびえる瞳には

澱が沈んだまま

細い光の糸よ

柵しがらみをとかせ

塞がれた地衣類の心よ

詩えうた

空も

冷たく震え

時間を刻むことを忘れ

凍った貌で立ちつくしている

帰国後

極寒のシベリヤを生きのびた

ひとりの画家は

虜囚こゆうの魂を描きつづけた

シベリヤを描きながら

私はもう一度シベリヤを体験している^{*2}

*1 山口県立美術館編集・発行

「香月泰男——シベリア・シリーズ——」より

*2 香月泰男のことば

広葉樹の森で

山と木々の物語を聞いた

片津 森

秋田市の自宅を朝五時に発って、藤里町の白神山地世界遺産センター（藤里館）に七時過ぎに到着した。八竜から高速を使うと二時間余りで着けるとは意外だった。受付時刻まで散歩したり車内でお茶を飲んだりして過ごした。八時過ぎに参加受付を済ませた後も時間まで車の中で目をつむっていた。

九月中旬の一日、藤里町商工会主催のイベントで藤里駒ヶ岳に登る。十時に権岱登山口を発ち、山頂で昼食、下山は田苗代^{たなしろ}湿原を経て午後三時二十分に黒石口に着く。所要時間五時間二十分という計画だ。

八時半、小型バスには参加者二十一人とガイドが乗り込んだ。ガイドの二人は地元出身者で、そのリー

ダーが道々、窓外の風景の解説をしてくれている。駒ヶ岳の名のとおり、春の融雪期には山の斜面に馬の雪形ができる。その様子は町部から見えること。今年目立って実が付いた木はオオカメノキで、ブナの実はほとんどつかなかったこと。素波里ダムの水量は、今年雪が少なかったため平年の半分だったこと。素波里の名は、急に周囲が狭まってくる地形をいうようだということ等々。

途中、バスが通過したところはリーダーの生まれ育った場所だと言っていたが、地元の人ならではの季節や地域の歴史の話も披露してくれ、その味が出てくるように感じ、飽きなかった。

藤里では昔から林業が盛んだった。それを支えたのが森林鉄道で、伐採した木材の輸送に使った。しかし、昭和三十年代には集中豪雨で広範囲の軌道が土砂に埋まって壊滅状態になり、復旧を諦めざるを得なかった。以後、トラック輸送の時代になり、軌道跡を利用するなどして林道網が広げられるようになった。粕毛川沿い住民は過去、何度も水害の被害に苦しんできたが、悲願だった素波里ダムが完成したのは昭和四十五年の

ことだった。

リーダーはバスが左右前後に揺れても立ったままマイクを離さない。やがて話はマイタケの食べ方の蘊蓄に移った。舗装路はとうに終わっていて、湿った土の林道はうねりくねり、小岳へ行く路を左の方に見やり、山の奥へ奥へと入っていく。路傍に同じ長さに切ったスギの丸太が積まれていた。米代トラックの名が見えた。これらの木材は秋田市内に運ばれています、とリーダーが説明する。大概はパルプや集成材になるが、良質のものは住宅用建材になるらしい。

二度、林道のでこぼこで車の腹がガリガリ鳴った。バスは一時間半かかって登山口に着いた。運転手さんは、この道の運転は今日が初めてらしいが、これから一人で今来た路を戻っていくというが、心細いだろうなあなどと思っていた。晴れているからいいけれど……。そして、午後には私らを迎えに下山口に向かうのだろう。

簡易トイレが三基あったので私も使わせてもらった。係りの人の声掛けで準備体操をし、二つの班に分

かれて列を作った。私は二班になっている。

私が一班を先導しますから、後ろには女性が付いてくださうい。男性はその後です。リーダーに従って山に入っていく人たち。次にもう一人のガイドが声掛けして二班が動き出す。そんな人たちを見送っているうちに、私は最後尾になった。すぐ前の二人は朝の集合場所で私の隣に車を停めた夫婦連れで、挨拶したときに濁上市から来たといっていた。私が最後尾だといっても、さらに後ろに付いた若い人がいて、受付でもらった配布資料に載っていたスタッフの一人のようだった。

ガイドの人が立ち止まって、そばの木の上的の方を指差して説明する。あれはツキヨダケですね。夜、光に当たらないと光りません。食べると毒ですよ。これはトチノキです。枝先から出ている葉柄は一本で、そこから葉が掌状に開いて分かれています。さつき見たホオノキと似てますが、ホオノキは葉柄が何本かあって、葉柄ごとに葉がついています。枝先で数枚の葉が放射状に開いています。トチの実が生だと苦くて食べられません。これを何度も水に晒して渋抜きして手間をか

けてトチモチを作るんです。このドングリは堅いですからね、上から落ちてくるので注意しましょう。スタッフがかがんで木の実を拾おうとしたとき、その足元に上からドングリが落ちてきたので、慌てて頭に手を当ててそこを離れた。なるほど地面に落ちた時、質量のありそうな音がした。これだと直接頭に当たったら痛いだろう。去年、新潟県村上市内の道の駅でトチ餅が売られていた。柔らかくほのかに甘く、新鮮な味覚だった。新潟でも藤里でも落葉広葉樹の森のある土地では遙かな昔から食していたと何かで読んだ。

こうした団体登山はペースがゆっくりだ。ちよつとした段差や倒木が道を妨げていると、前を行く人がそこを通過するのを後ろの人が待ち、さらに後ろの人が待つ。ある種の渋滞になる。これは致し方ないことで、ケガなく通過することが大事だ。それにしても深い山だ。ブナは太く高い。さっきのトチノキにしてもかなりの高さだった。前を行く人の後ろのクツが地面から離れるとき、地面がクツシヨンのように弾んだ。落葉広葉樹の森であることが実感できる。

徐々に高度を上げていくうちに、もう森林限界を

超えたようで、辺りが低木帯になって急に開けたので皆、わあ、とか歓声を上げている。上からガスが降りてきて二、三十メートル先を白くしている。やがて鎖場の下に着いた。ガイドに指示されたとおりにストックを短くしてザックに結わえ、体のバランス保持には手を使う。軍手を忘れてきたことに気づいたが、裸の手で十分。

ガイドが知らせる。もうすぐで山頂に着きますよ。昔の山頂だったところがありますが、そこからすぐです。なぜ、山頂が移ったのか。標高を精密に調べた結果、ほんのわずかの違いで隣のピークの方が高かったというのですか、と後ろのスタッフに聞いてみた。ありえますね、と答えてくれたが事情は彼も分からないようだ。

山頂広場には「標高一一五七・九米」と記した標柱や三角点の石などがある。眺望はガスできかないが、雲の切れ間から陽が差してくるだけましという感じだ。十六年も前の春、町観光協会主催の登山行事に参加したときは、黒石登山口からのルートを往復した。残雪

の斜面を登った。山頂ではガスと小雨の中の昼食となった。何も見ることなく、雨と雪で白っぽい山を濡れながら下った。それでも湿原でミズバショウとリュウキンカを見たし木々の新芽もよかった。

皆が三々五々の昼食を終えた頃、リーダーが皆を集めた。ガスついていて見えませんが、晴れていればこんなふうです、といって写真を掲げた。これが小岳ですが、あっち（左手）の方です。小岳からみる白神山地は素晴らしいです。岩木山は正面です。ここから一跨ぎで行けますよお、と冗談。その後、下山の支度をしている、見えた見えたと声が出たので、顔を上げて、指差す方に目をやった。山が遠くにあった。小岳の角だったが見えたのは十秒もなかったと思う。すぐにカーテンを引いたようにガスが隠してしまった。

下山が始まった。私が属する二班の方が先に発つ。今度は二班をリーダーが先導する。彼が指さした大木はシナノキというらしい。樹皮はミズナラの木に似て縦に幾筋もしわが入っている。この樹皮は繊維が布や繩の原料になった時代もあったようです。そうだった

のかと頷いていると、私いつか聞いたことある、と参加者の誰かがいった。下りは急な傾斜だ。リーダーが立ち止まって説明を始めた。あそこにスギがあります。あっちにも。みな成長が途中で止まったようで、大きなれません。戦後の高度経済成長期に、ブナを伐採し、その跡地にスギの植林が急速に進められたんです。しかし、ここは標高が高く寒冷でスギには向かなかつた。樹木には適地というものがあるのに、それを無視して当時の林業政策で杉が植林された。ブナにもスギにも実に気の毒だったということです。

似たような話は登山口に向かう朝のバスの中でも聞いた。その山の環境に適した樹木が生きているのに、それが人間の手によって皆伐され、スギの人工林が造られました。でもスギだけの林は陽が入ってこないんです。いわば死の森です。しかし、やがてスギの中には死んで倒れたりするものもあって、そこに日が差し込むと植物が生え、他の樹木が育つようになります。広葉樹林がそのようにして育つと、そのうち針広混交林になっていきます。さつきリーダーはそんなことも話していた。

下りも終わりかけたあたりで、後ろのスタッフの人にリーダーの名前を尋ねてみた。サイトウさんですね。斎藤栄作美さん。白神ガイド連絡協議会の会長さんをしていきます、と教えてくれた。バスの中で、自分は藤里の山育ちで林業に携わったことがあると言っていた。紅葉の時期はいいですよ、とスタッフの声が聞こえた。でもなあ、一人二人で来るのは心細いなあ、と私。そうですね。でも休みの日など黒石登山口付近は県外ナンバーの車も結構並びますよ、とスタッフ。やがて、路は木道に変わった。田苗代^{たなしろ}湿原を通っていく。薄緑や黄や茶に変色した湿地性植物が寒そうに群れている。湿原が終わりそうな辺りで、リーダーの斎藤さんが立ち止まり、右背後の山を見るように促した。彼は再び写真を見せて言った。あの山が全く人の手の入っていない広葉樹の森です。今はブナの純林になっています。ブナの樹冠のどれひとつ上に飛び出たものがない。美しく森になっています。木のてっぺんが他の木より高く飛び出たしまえば、風雪を受けやすくなるため、森の木自身が風雪から身を守る知恵を働かせているんです。山はこれから秋、そして冬になります。冬

の山は眠るのではなく、春の芽生えのため、静かに準備をしているんです…。写真はあの森の四季それぞれの様子を写し撮ったものだった。斎藤さんがさらに言葉を続けたがよく覚えていない。ただ、参加者の一人が、詩を聞いているみたいだあと感動していた。なんとなく私もそう感じた。

写真まで準備して私たち参加者に知ってもらおうとするところに、斎藤さんのガイドとしての強い意識を感じた。そして、幼いころ、彼自身その麓で育った白神山地へ寄せる深い思いも。

*

山菜など山の幸を自分では採らず、買ったものをいただくだけだから、長い間、山や山村を遠景としてみていたが、山歩きをするようになってから、土産にする収穫が何もなく、高い木々の足元から森を透かし見るだけであっても、落葉広葉樹の森の豊かさを何気なしに感じてきた。一時間でも山を歩けば、ただ呼吸をしていてさえ身体をめぐる血が浄化される気がしてくる。ましてや、今日などは白神山地の広葉樹の森で山と木々の話を聞くことができた。それは人が山と木々

に与えた過ちを織り込んだ物語のようだった。私が聞
けたのは、そのほんの一部だったにしても、この上な
い幸運だったし、濃い一日を歩いた気がした。



水田とツバメ（四）

佐藤 ただし

九月に入り例年であればツバメが南へ飛び立つ時期になったが、今年はツバメのことをすっかり忘れて時を過ごしてしまった。

前号にも書いたが昨年の七月に六名で法人を作り、今年から田植えや枝豆の収穫などを一緒に作業していたため、稲刈りもなんとなく一緒にするような気持ちにはなっていたが、具体的な作業の仕方をはっきり決めていなかったため、刈り取りの時期を迎えても、為すべきことが定まらないもやもやとした時を過ごしていた。

昨年までコメについては個々の構成員が自分で所有している作業機械や、集落営農組織時代に共同で購入した機械を使用して、自作地や個々に借り受けていた

小作地を耕作し、その他の枝豆や大豆については共同で作業を行い収穫していた。

枝豆や大豆については昨年と同様で、全く問題はなかったが、コメについては昨年と同じにするのか、刈り取りから出荷まで、共同でやるのか決めなければならなかった。

結局、今年はグループで作業をすることにし、刈り取りや運搬、糶摺り、出荷と役割を決めて作業をすることになった。

イネは朝露が葉や籾に付着して濡れているうちは刈り取り作業をしないため、九時半頃にその日刈り取りする田んぼに行き、田んぼの四隅を刈ったり、イネを刈るコンバインの手入れをしたりして、一〇時過ぎから稲刈り作業を始める。

私は刈り取りのオペレーターと籾をミニライスセンターへ運搬する仕事を主にしたが、これまで自分で耕作していない田んぼの稲刈りをするのは初めてのことであった。実際にやってみると、イネの出来や圃場の硬さなど、他のメンバが作った田んぼの状態を知るのは大いに参考になった。また、イネを刈るコンバイン

の使い方など、他のメンバーのやり方を知ることが出来たことも収穫であった。

また、糶摺りや乾燥をするミニライスセンターが当地区にはあるが、その施設を共同所有している構成員が当グループに二名いたこともあり、糶摺りや乾燥・調製・出荷を一括して行うことが可能なため、従来に比べ稲刈り作業に費やす日数を短縮することが出来た。更に圃場が一ヘクタールと三〇〇アール規模の圃場が半分くらいを占めていることも作業効率を向上させる一因といえる。

一方でこうしたやり方は、作業を分担しているため、自分で育ててきたイネを自分で収穫し、成果を自分で確認することができないという一面も持つ。また水田についても個々に耕作面積を増やしてきた構成員もあり、農業に対する考え方は一様ではないということをも改めて知ることになった。

また土地の共有は自分なりに土地に工夫を凝らしてきたという側面を消し去ってしまうおそれもあり、永続的に耕作し良い土壌にしてゆくという観点を持ち続けるとすれば、かなり意識的に取り組んでゆかなければ

ばならないことだと思った。

今年の当地区は台風やカメムシによる被害も少なかったため、品質も良く収量の面でも昨年より多いという話をよく聞いた。

稲作が終わり、一〇月後半からは大豆の収穫に入り、ひと月程で収穫作業を終了した。

今年はツバメがいつ頃姿を消したのか、全く気付かないうちに九月が過ぎてしまった。気持ちに余裕がないと鳥も目に入らなくなる。

一月後半の日曜日、雄物川の河口に近い河川敷に鳥を見に行った。堤防から川までの距離は約五〇メートル。その中ほどに幅一、五メートルほどの舗装された散策路が川に沿って作られていた。道路脇の短く刈られた草は枯れ、川の縁に細い木々の枝が伸びていた。車に積んであった双眼鏡を取り出し、首に下げて川の縁のほうへ歩いてゆくと、細い木々の枝の間でちらちらと動くものがある。

スズメほどの大きさの鳥が、木々の枝から枝へ動いてゆく姿があった。双眼鏡で見るとベニマシコのメス

だった。近くにいたもう一羽はオスのベニマシコだった。この鳥はベニという名前がついているように、オスの羽根のあたりから首元にかけて深紅色で、目にも鮮やかな小鳥である。メスのほうは頭からお腹にかけて、地味な黄褐色をしている。羽根は黒く、二本の白線が入っている。オスに対してメスは地味で控えめな感じだ。木々の枝の陰から現れたり隠れたりして、時々フィツ、フィツと可愛く鳴く。

そういえば、今年の初めにもここで見かけたことを思い出した。

この日は朝から気温が低く、家の外に置いてあった散水用のホースは凍結していた。風は冷たく、歩いているとズボンの外から冷気が伝わってくる。

ベニマシコの姿をひとしきり双眼鏡で追って、川面に目を向けると、静かに流れる川の中流にカワアイサが上流に顔を向けて泳いでいた。四羽いた。そうしているうちに一羽、二羽と水中から顔を出し総勢七羽となった。

カワアイサのオスの腹部は白く見え、頭部は冬の弱い陽を浴びて濃い緑色に光っている。メスは頭部が茶

褐色に見え、冠羽の形が特徴的だ。メスを見ていると、今年亡くなったデビット・ボウイの若い頃の横顔を連想してしまう。

視線を上げると、すっかり冬の姿となった太平山の山脈がくつきりと見えた。中岳の頂上近くに影を落としていた白い雲がゆっくりと東へ流れてゆく。

ダイサギやカワウが水面を低く飛んでゆく。カワウは何か忙しそうだ。

カワウと書いたが、カワウとウミウを見分けるのは難しい。以前、由利海岸の探鳥会に参加した時、カワウは海にやってくることはあるが、ウミウは川に飛んでこないと話しているのを聞き、それ以来川でウを見かけると勝手にカワウと判断しているのだが、もしかすると間違えているかもしれない。

川の縁に立って遠くに見える太平山を見ていると、エナガの群れが木々の枝から枝へ飛び移りながら近づいてきた。そのうちの二羽は、五メートルの距離まで近づいてきた。エナガはベニマシコやスズメよりも小さくスリムな小鳥だ。口元からお腹にかけて白く、背は黒と紅紫色。二十羽くらいの群れだろうか。チュル

ルという特徴のある鳴き声を発して木の枝の上になったり、下になったりしながら枝から枝へ飛び回っている。木の芽でも食べているのだろうか。シジュウカラも群れの中に混じっていた。

日は陰りはじめ、対岸で泳いでいるカルガモの姿がようやく分かるほど暗くなってきた。ハクチョウの鳴く声が聞こえてくる。エサ場となる、近郊の田んぼから帰ってきたようだ。その数は次第に増え始め、四〇羽ほどになった。岸辺に近い浅瀬で羽根がグレーな幼鳥の姿も数羽見かけた。今年シベリヤや北極圏に近い処で生まれた幼鳥が親鳥に付いて、よくこの地まで飛んできたものだ。絶えず鳴き続け、家族や仲間にも自分の位置を知らせているのだろうか。

車のライトや近くの工場の灯りが映し出されて輝く川の流れの中で、次第に増え続けるハクチョウをしばらく見ながら家に帰った。

雑記 (6)

横山 仁

【反骨の元外交官が世界と日本の真実をリアルタイム解説】「天木直人のメールマガジン」2016年11月27日第865号では、「戦争で殺される前に生活苦で殺されることになる日本国民」として書いている。

(引用開始)

総額約1兆円に上る補正予算には、経済対策関連予算は計上されず、なんとその2割に当たる約2000億円を、既存のミサイル防衛システムの強化に充てるといふ。

これではいくら予算があっても足りない。

おりから、安倍首相は、消費税増税はいうまでもなく、社会保険、医療保険の負担増や年金削減をどんと強行し、国民生活を猛烈な勢いで苦しめている。

一億総中流のはずであった日本が、いつのまにか、一握りの富裕者と多数の生活困窮者に急速に分断されつつある。

(引用終わり)

1950年、「貧乏人は麦を食え」といったのは池田勇人だが(正確ではないらしいが)、abe chanはなんとこののだろうか。「貧乏人は自衛隊へ」かいな。

「865号」に追加して、2016年11月28日「第868号」では、「国民はミサイル強化予算と原発事故対策予算で潰されてしまうことになる。」というが、すでに、ホで日本は潰れているんじゃないか？

また、2016年11月26日「第864号」で

は、年金カット法案にふれている。「読売、毎日、日経、産経はいずれも年金改革法案と垂れ流しているが、朝日、東京、共同（地方紙）は、はつきりと年金抑制法案と書いている。」とあった。念のため、「共同（地方紙）」の11月26日の秋田魁新報は、「年金改革法案成立へ」となっている。裏で何かあるのかわからないが、安倍新聞ということなのだろう。河北新報のネットでは、「年金抑制法案」となっていた。

また「週刊現代」12月10日号によれば（「天木直人のメールマガジン」2016年11月27日第865号による）

（引用開始）

安倍首相がまっさきにトランプと会談することを知ったケネディ駐日米国大使は「来年1月20日まで、オバマ大統領が唯一の米国大統領だ」と激怒したという。

そしてトランプに猛抗議したという。

以後、他国の首脳らがトランプと会談しなかったのは、安倍首相がトランプに特別扱いされたからではまったくなく、トランプが、「もう二度とやらない」とホワイトハウスに詫びを入れたからだと言う。

（引用終わり）

これほど、書くネタに困らない首相もいないだろうな、馬（鹿）の耳に念仏だろうが。

* * *

フクイチによる放射能（放射性物質）が、日本はいうまでもなく、世界中に降り注ぐ（垂れ流す）以前、ドジャースというデイスカウトショップで安いにんにくをみていたら、それは「中国産」ですよ、といった女性がいいた。日本は農薬大国であるにもかかわらず、それによる被害があまりニュースで流されないようだし、それに比べて、中国産などは、なにかあるとすぐに大きく報道される。わが老母どのも、「日本産は安全」

としんじてうたがわれない。
ところが、実際に中国に行った人は、「掲示板：放
知技（ほうちぎ）」で次のように書いている。

(引用開始)

371 : 堺のおっさん :2016/10/07 (Fri) 17:09:51 host.*.
ocn.ne.jp

中国にはデブが増えた。
しかし固太りで、力持ちタイプのデブだ。

ジヤンクフードでセルライトだらけのブヨブヨデブが
わんさかいる国とは違う。
明らかに食い物が違うようだ。

中国産の食品で高濃度の危険な農薬漬けの作物を栽培
しているのは事実。
しかし、そうした食品を日々食べ続ければ中国では寿
命も縮まることだろう。

そうならないのは、中国の国民が危険な食品を食べて
いないからだ。ばれたら、例のチャットでたちまち情
報が中国全土を駆け巡る。
むしろ国は規制をしている。

日本の商社が、これでもかというくらい安く作らせて、
危険な食品を日本人に食わせている。

それが事実だ。

(引用終わり)

また、「IN YOU —Journal for the Macrobiotique—」
2016.07.09 は、次のように書いている。

(引用開始)

ヨーロッパで使用禁止の農薬が日本では野放し状態。
農薬大国日本の実態

2020年の東京オリンピックとパリオリンピックに向け
て、今、日本の「世界第3位の農薬使用量」と「甘い

「農業残留基準」が浮き彫りにされつつあります。

オリンピックの選手村の食堂で使用される農産物の国際規格である「グローバルGAP（農業生産工程管理）」。ヨーロッパの農産物の約8割をカバーし、世界80か国以上で8万を超える生産者・団体が認証を取得する国際規格です。

チェック項目は農作物の安全性のほか、農業による水質汚染を防ぐ方法や生産者の労働環境など約250項目。この基準により、日本の農業の使用基準の緩さが表面化します。

ヨーロッパで使用禁止の農業が日本では野放し状態。WHO（世界保健機関）の報告書で胎児への影響が危惧されている農薬でさえ、日本では使用可能。水質汚染につながる肥料の使用量の規制もなく（ヨーロッパでは規制あり）、健康被害を引き起こすと危惧されている硝酸態窒素の基準値もありません。

そんな中、世界基準ともいえるこの国際規格の認証を取得できる農場は日本に存在するのでしょうか？

国産野菜の安全神話を信じ、農業がどの国よりもたっぷり使用されている国産野菜を好んで選んでいるのが、今のわたしたち達の現状なのかもしれません。

（引用終わり）

「日刊SPA!」2016.02.08 ニュースは、かく。

（引用開始）

「国産農産物が安全」だと思っているのは日本人だけ!?

「日本の農産物は安心・安全」。常識だと思っていたことが、海外ではまったく違う捉えられ方をしている。甘い安全基準が不安視されているのだという。東京五輪やTPPを控え、日本の農産物は大丈夫なのか？

【国産農産物は安全】神話が崩壊する！

昨年11月23日、無農薬栽培で有名なリンゴ農家の木

村秋則氏が、農業関連のシンポジウムでこんな“爆弾発言”をしていた。

「世界70か国の若手農家の集いに呼ばれてイタリヤを訪問した際、『日本の農産物は本当に安心なのか。東京五輪のときには選手団にイタリヤから食材を持参することを考えている』と言われました。日本の農産物が『安心・安全』というのは大間違いです」

司会を務めていたタレントの高木美保さんは「そこまで厳しい評価ですか……」と驚いたが、木村さんの対談相手を務めていた2人のパネリストも同じ見方だった。歌手のワドソナのフライベートシエフとして有名な西郷まゆみさんが「今回、ワドソナも来日するのですが、『日本に安全な食材はあるのか』と言っています」と内輪話を披露。

(引用終わり)

そもそも東京五輪なんて、やれるはずはないと小生は思っているのだが、ホッ、ホー。

さらに「日刊SPA!」2016.02.22 ニュース。

(引用開始)

日本の農薬使用量は世界第3位!?“農薬ムラ”に群がる癒着の構造

「日本の農産物は安心・安全」——マスコミ報道でよく耳にする“いい話”は本当なのだろうか? そんな“大本営発表”の裏側を徹底検証。常識だと思っていたことが、海外ではまったく違う捉えられ方をしている。甘い安全基準が不安視されているのだという。東京五輪やTPPを控え、日本の農産物は大丈夫なのか?

◆“世界第3位の農薬使用量”の国・日本

日本の耕地面積当たりの農薬使用量は、中国、韓国に次いで世界で第3位だ。農薬を大量に使うイメージのある米国の、何と約5倍。そんな“農薬大国”の農産物を輸出しようとしても、不安が募るのは当然だ。しかし“大本営化”(御用メディア化)したマスコミ

はこうした基本的データすら伝えず、「日本の農産物は安心・安全」という情報を垂れ流しているのだ。

「世界第3位の農薬使用量」と「甘い農薬残留基準」は表裏一体の関係にある。大量に農薬を使っても甘い残留基準をクリア、“商品価値”を失わずに市場に流通することができるとからだ。そして「農薬大国日本」の屋台骨こそ、農水省や農水族議員やJA（農協）や農薬メーカーから成る“農薬ムラ”だ。農水官僚は関連団体に天下り、農協など関連団体・企業は選挙や献金で自民党を支援するという癒着の構造。結局、甘い残留基準が温存されて農薬多消費型の農業が横行することになるのだ。

（引用終わり）

かなり前によんだ立花隆の『農協』でも、たしかこのような結論だったような気がする。井の中の蛙ということなんじゃないかな。

また、遺伝子組み換えの大本締め、モンサントがドイツの大手医薬品メーカーのバイエルに身売りする

ようだ。（「米除草剤・農薬バイオ技術大手モンサントは14日、ドイツの製薬・化学大手バイエルによる570億ドル（約5兆8100億円）の買収に合意した。」THE WALL STREET JOURNAL 2016.09.15）

「日本のTPP締結の動きに、モンサントににじり寄り提携したのは守銭奴で有名な住友グループの住友化学（提携は前経団連住友化学会長時代）であった。」と書くのは「経済・政治・時事問題の情報幅広くキュレーションするサイト」JCnet。（ちなみに、永田農法で推薦する化学肥料、住友液肥は、住友化学で生産しているが、「イギリスでは有機肥料やオーガニックを「体にいい」「健康にいい」「おいしい」と結びつけてコマーシャルすることが禁止されているんです。」とは、「いまぼ日」でのNHK・諏訪雄一氏）また、JCnetは、こうもかいている。

（引用開始）

<アメリカでも食用小麦はGM種禁止>
少なくともアメリカでは20年前から、食用小麦以

外はすべて遺伝組み換え種子(GM種)による作物・穀物が生産されている。ただ、20年も経つが主食となるパンの原料である小麦は安全面から、今だ遺伝子組み換え種子による栽培は許可されていない。…何を物語っているのだろうか。)

(引用終わり)

「文殊菩薩」では、野崎晃氏が書いている。

(2016.11.16)

(引用開始)

台湾で日本の食品輸入解禁に反対運動

台湾では放射能の危険性があるとして福島・茨城・栃木・千葉で生産された食品が輸入禁止とされてきたが、このたび蔡英文政権による輸入を解禁しようとする動きに各地で反対運動が起こっている。台湾当局が各地で公聴会を開催して説明をしているが、住民たちの不安や反対の声は高まるばかりだ。

公聴会の会場では「蔡英文がまず食べればよい」と抗議の声が上がり、暴力や流血の事態に発展するほど反対が激しいという。最近の台湾での調査によれば74.6%の人が放射能の危険があるとして輸入解禁に反対している。

中国でも未だに福島・群馬・栃木・茨城・宮城・山形・新潟・長野・山梨・埼玉・東京・千葉などの食品の輸入が禁止されている。青州から近い青島でも福島沖で取れた魚介類を不法に輸入したとして輸入業者が逮捕され、魚介類を中心に食品輸入の監視が強化されている。

中国や台湾ではこれらの動きが大きなニュースとなっているが、日本のメディアではほとんど取り上げない。なぜなら、中国人でも食べないものを日本人が強制的に食べさせられているということを日本人に気づかれないからだ。

(引用終わり)

ようするに、じぶんの身は、じぶんで護れということ、だしな。

* *

「IWJ Independent Web Journal 2015.10.16」から。

(引用開始)

父親の高木孝一元敦賀市長が「50年後、100年後に生まれた子どもが片輪になるかもしれない」が「原発は金になる」と言い放った約30年前、息子は女性宅に侵入して下着を盗んでいた——「パンツ泥棒」スキャンダルに狼狽する高木毅新復興大臣に被災地復興の重責が担えるのか!?

(※) 高木孝一氏の講演内容 (中略)

…で、実は敦賀に金ヶ崎宮というお宮さんがございまして (建ってから) 随分と年数が経ちまして、屋根がボロボロと落ちておった。この冬、雪が降ったら、これはもう社殿はもたんわい、と。今年ひとつやって

やろうか、と。そう思いまして、まあいたしたカネじゃございませんが、6000万円でしたけれど、もうやっぱり原電、動燃へ、ポツポツと走って行った (会場ドットと笑い)。あつ、わかりました、ということ、すぐカネが出ましてね。それに調子づきまして、今度は北陸一の宮、これもひとつ6億で修復したいと、市長という立場ではなくて、高木孝一個人が奉賛会長になりまして、6億の修復をやらうと。今日はここまで (講演に) 来ましたんで、新年会をひとつ、金沢でやって、明日はまた、富山の北電 (北陸電力) へ行きますとね、火力発電所を作らせたる、1億円寄付してくれ (ドットと笑い)。これで皆さん、3億円既に出来た。こんなの作るの、わけないなあ、こういうふう to 思つとる (再び笑い)。まあそんな訳で短大は建つわ、高校は出来るわ、50億円で運動公園は出来るわね。火葬場はポツポツ私も歳になつてきたから、これも今、あのカネで計画しておる、といったようなことで、そりゃあもうまったくタナボタ式の街づくりが出来らんじゃなからうか、と、そういうことで私は皆さんに (原発を) お薦めしたい。これは (私は) 信念を持つとる、信念!

あとがき

◆トチモチ作りは年寄りや女たちの冬の仕事だったと、野添憲治さんはエッセー集『九十九章』の中に書いている。他にも藤里の山村の暮らしぶりの幾つかを回想している。読むうちに、そんなふうには、山は麓の人の暮らしを抱いていたし、人は山と不可分の感性を育てていたんだろうなあと、思っていた。(K)

◆4月の熊本地震の後、自宅の耐震強度が気になり業者さんに診断してもらった。結果は予想通り評価点の低いものだったが、昭和43年に建てられたことを考えれば無理もない。この後、20年くらいは住めるようにと、大工さんに台所の床を剥いでもらったところ、基礎の上に使われていた栗の木は朽ちておらず、そのまま使用することになった。適材適所というが、約50年前に丈夫な素材を使ってくれた祖先に感謝。(T)

◆招待席を設け、「水の詩人」矢代レイさんをお招きした。個人詩誌「ピッタインダウン(おきあがりこぼし)」を発行するなど、いま輝いている詩人の一人といえよう。「海市」の感想も、かならず寄せてくれる…。(J)

◆過日、秋田市芸術祭『古典芸能のつどい』へ行ってきた。箏曲、篠笛、清元、常磐津などを直に見聞きするのは初めて。それまでの先入観が、まさに先入観であったことに気付かされた日であった。もっとこういう機会を自ら得ないといけないな……。限られた時間を感じたりもした。(B)

「海市」 第6号

2016年12月20日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方

……えー、その代わりに100年経って片輪が生まれてくるやら、50年後に生まれた子供が全部片輪になるやら、それはわかりませんよ。わかりませんが、今

の段階では(原発を)おやりになった方がよいのではなからうか……。こういうふうに思っております。どうもありがとうございます。(引用終わり)